

知的障害児・者の自傷行動の研究Ⅲ

一行動特性チェックリストの開発と林の数量化Ⅲ類による分析の試み一

肥後 祥治*・小林 重雄*

本研究の目的は、自傷行動を維持する要因について、彼らの行動特性から明らかにすることであった。肥後・小林（1990¹⁾）の分析で用いられた適応行動尺度の素点の分析を通して適応行動尺度を分析することの問題点を指摘し、自傷行動を有するものの行動特性を測定する方法の検討がなされた。さらにそれらの方向性に従ってチェックリストが試作され、林の数量化Ⅲ類をもちいて分析が試みられた。抽出された成分のうち、2成分に対して解釈が試みられた。第1成分は、“対社会的交渉様式の成分”であり、第2成分は“痛覚に関連する身体的要因と会話能力に関する合成成分”であると考えられた。第1成分は、小林の自傷行動分類における視点を支持し、また、第2成分は、これまで余り評価されてこなかった身体的・生理的負因の再評価の必要性を示すものであった。

キー・ワード：自傷行動 林の数量化Ⅲ類 知的障害

I. はじめに

我々は、これまで自傷行動を有する知的障害児・者の施設での実態、臨床像、行動特性の分析に関する研究を行い、わが国においてこれまで不足していた自傷行動を行う者の母集団の記述の資料を提供してきた（肥後・小林；1990¹⁾、肥後・小林；1992²⁾）。この作業は、自傷行動を有する者の行動特性を探り、自傷行動の分類を検討していく上で必要不可欠なものであった。本研究もこれら研究の延長上に位置し、自傷行動を維持している要因を明らかにしようとするものである。

本研究では、この目的を達するために、肥後・小林（1990¹⁾）で収集された適応行動尺度の素点のデータを記述統計的視点で再検討し、行動特性を分析するための項目の検討および、チェックリストの試作を行った。またそのチェックリストをもとに集められたデータの分析を林の数

量化Ⅲ類を用いて行った。

II. 適応行動尺度の素点分析

1. 目的

本研究のIIの部分では、肥後・小林（1990¹⁾）の適応行動尺度の因子分析による研究の際収集されたデータを、記述統計的視点からみることによって、自傷行動をもつものの行動特性を測定する上で重要な領域・項目の検討を行うことを目的とした。

2. 方法

1) 対象児

本研究のIIの部分のデータは、肥後・小林（1990¹⁾）の適応行動尺度による行動特性の分析のために収集されたものである。したがって、対象者、調査手続き、内容、期間については、同様である。

対象者は、3ヵ所の精神薄弱児・者施設に措置されている者のなかで自傷行動を行う者67名。このうち13才未満が、2名（両者とも男性）で

*心身障害学系

あった。男女の割合は、それぞれ50.7%と49.3%であった。知能障害の程度は、軽度1名、中度3名、重度11名、最重度57名で最重度のうち44名が測定不能であった。また対象者の平均月齢は307.4カ月(約25才6カ月)、標準偏差が101.1カ月(約8才3カ月)、年齢幅は11才5カ月から54才2カ月であった。

2) 調査内容

調査紙としては、日本文化科学社から市販されている適応行動尺度(Adaptive Behavior Scale: ABS)を用いた。このABSは、2部から構成されている。第1部においては、自立機能、身体的機能、経済的活動、言語、数と時間、家事、仕事、自己志向性、責任感、社会性の10領域-69項目(児童用67項目)に関して能力の測定が行われる。第2部においては、暴力的および破壊的行動、反社会的行動、反抗的行動、自閉性、常同的行動と風変りな癖、適切でない対応の仕方、不快な言語習慣、異常な習慣、自傷行為、過動傾向、異常な性的行動、心理的障害、薬物の使用の13領域44項目についての項目が設定されている。

3) 調査手続き及び期間

各施設の対象者の担当の指導員・保母に適応行動尺度(ABS)を配布し該当者に関して記入を依頼。後日、各施設の回収責任者に記入済みのABSを回収してもらい、それらを受け取った。(留め置き法)。また、調査者が受け取る時点で記入もれを発見した場合は、該当者に関する情報をその場で収集し欠損値を少なくするよう努めた。

また、調査期間は、1985年9月～10月であった。

3. 結果

回収されたデータは、素点を算出した後、筑波大学情報処理センターのSPSS(Statistical Package for Social Sciences)の記述統計を用いて分析された。各項目ごとの素点の可能最高得点(MS)、平均値(M)、標準偏差(SD)、最小値(MIN)、最大値(MAX)、及び平均値の可能最高得点に対する割合(M/MS)はTable

1に示した通りである。

第1部は、人が日常生活の場において自立する際に重要だと考えられる領域であるが、ここでの可能最高得点に対する各領域の平均値の割合(M/MS)は30.4%であった。またこの値が70%以上であったのは、13才未満の自立機能と身体的機能だけであり、これらを除くと5.0～43.8%の値を取った。第2部は、パーソナリティーの歪みと行動異常を測定するための領域である。ここにおける平均値の可能最高得点に対する割合(M/MS)の平均値は86.3%であり、全ての領域が70%を越えていた。値の変域は77.7～91.2%であった。

4. 考察

1) 因子分析と記述統計の結果から

本研究に先立って行われた、適応行動尺度の因子分析による検討過程(肥後・小林1990¹¹⁾)では、富安・松田・村上・江見(1974¹²⁾)の精神発達遅滞者の適応行動尺度に因子分析を行った研究で得られた結果と異なる因子構造が得られた。すなわち、固有値が1以上の因子が7個抽出されたこと、第1部の因子構造が3つの因子によって構成されず、「日常生活全般における問題解決能力の因子」と「社会性に関する因子」の2つに収束されたこと、第2部では、因子構造が拡散してきたことがそれである。因子構造の差異はFig.1に示した。このことは、知的障害を持ち且つ自傷行動を持つものの行動の構造と精神遅滞児・者全体のそれとが異なっていることを示しているものと思われる。

今回の分析対象の多くは結果的に重度・最重度の遅滞を有していた。したがって、素点の記述統計量は、第1部においては全体的に低くなり、それとは逆に第2部では高得点を示す結果となった。このことは、広い範囲におよぶ母集団を対象に行動を測定するABSが、自傷行動を有する者の行動特性を検討する場合に感度が低い部分を含み、逆に更に細かい内容に関して感度が低い項目で構成されている可能性を示している。すなわち、自傷行動を有する者の行動特性を詳しく検討するためには、従来の精神遅

Table 1 各項目の記述統計量

	領域	MS	M	SD	MIN	MAX	M/MS : %
第1部	自立機能	C : 111	80.0	33.9	56.0	104.0	<u>72.1</u>
		AM : 113	49.5	23.7	10.0	104.0	43.8
		AF : 117	23.7	23.3	13.0	93.0	20.3
	身体的機能	24	17.6	4.2	4.0	24.0	<u>73.3</u>
	経済的活動	C : 16	3.5	5.0	1.0	6.0	21.9
		A : 18	0.9	1.6	0.0	7.0	5.0
	言語	41	8.1	6.7	0.0	23.0	19.8
	数と時間	12	1.9	2.7	0.0	12.0	15.8
	家事	18	2.2	2.9	0.0	11.0	12.2
	仕事	C : 6	2.5	2.1	1.0	4.0	41.7
A : 11		2.4	3.4	0.0	11.0	22.0	
自己志向性	25	6.0	5.3	0.0	20.0	24.0	
責任感	6	0.8	1.1	0.0	4.0	13.3	
社会性	28	11.4	3.4	0.0	21.0	40.7	
第2部	暴力・破壊	26	22.1	3.7	11.0	26.0	<u>85.0</u>
	反社会的行動	39	34.3	5.3	11.0	39.0	<u>87.9</u>
	反抗的行動	24	19.1	4.5	5.0	24.0	<u>79.6</u>
	自閉性	14	11.8	2.8	1.0	14.0	<u>84.3</u>
	常同的行動	13	11.1	2.1	3.0	13.0	<u>85.4</u>
	不適切な対応	7	6.3	1.1	0.0	7.0	<u>90.0</u>
	不快な言語	7	6.0	1.4	0.0	7.0	<u>85.7</u>
	異常な習癖	29	25.9	3.4	15.0	29.0	<u>89.3</u>
	自傷行為	9	7.0	1.1	3.0	9.0	<u>77.8</u>
	過動傾向	3	2.6	0.7	0.0	3.0	<u>86.7</u>
	異常な性行動	17	15.9	1.7	7.0	17.0	<u>93.5</u>
	心理的障害	34	31.0	2.8	21.0	34.0	<u>91.2</u>
薬物の使用	4	3.4	0.6	2.0	4.0	<u>85.0</u>	

MS : 素点の得点可能最高得点

M : 平均値

SD : 標準偏差

MIN : 最小値

MAX : 最大値

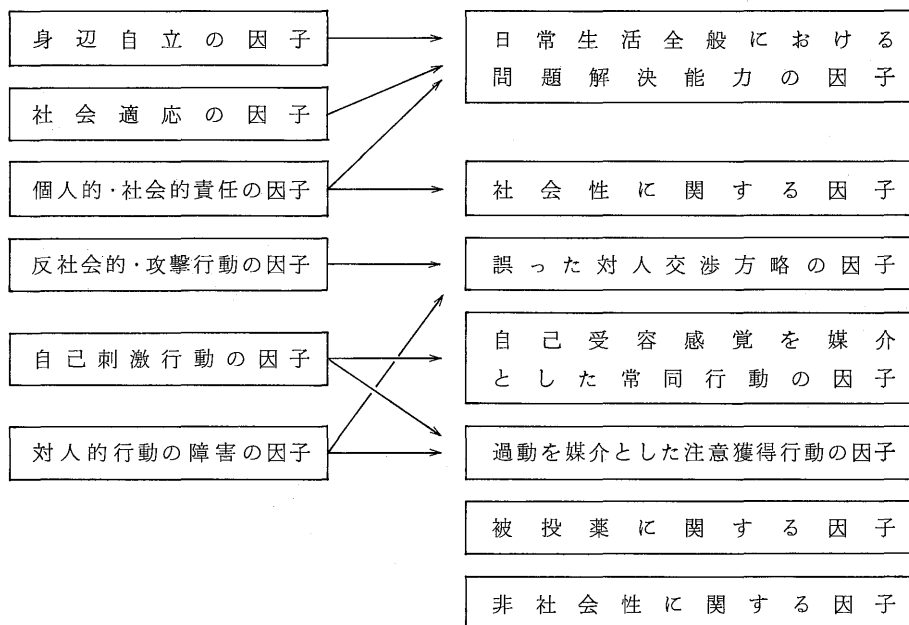
M/MS : 平均値の得点可能最高得点に対する割合

C : 3~12才

A : 13才以上

AM : 13才以上男性

AF : 13才以上女性



富安・松田ら (1974¹¹⁾) の結果

肥後・小林 (1990¹⁾) の結果

Fig. 1 抽出された因子の比較

滞のために開発された質問紙ではなく、使用対象を自傷行動を有する者に絞ったものを使用する必要性を示唆するものであると考えられる。

2) 質問紙の領域・項目の検討

ここでは、先に示した因子分析の結果を基に質問項目の内容について検討してみたい。因子分析によって抽出された因子は、7個である。これらのをさらにグルーピングすると、Fig. 2のように整理し得る。

A：問題解決能力

I. 日常生活全般における問題解決能力の因子

B：対社会的関係の様式

①：反社会的様式

II. 誤った対人交渉方略の因子

IV. 過動を媒介とした注意獲得行動の因子

②：非社会的様式

VI. 非社会性に関する因子

III. 自己受容感覚を媒介にした常同行動の因子

③：適応の様式

VII. 社会性に関する因子

C：中核障害を含む生理的負因

V. 薬の使用に関する因子

Cの中核障害を含む生理的負因の項目には、1個の因子しか含まれていないが、この項目は他の2つの項目のベースになっているものであると考えられる。特に対社会的関係の様式の非社会的様式、問題解決能力などはそれぞれこの項目の影響が多いことが予想される。

これらのことから、質問領域は、3つに分けて項目内容を検討することが妥当であると思われる。しかし、素点の記述統計量をみると、対象となる自傷行動を有する精神発達遅滞児・者は概して問題解決能力の領域に属する項目での正の反応が低いことが予想される。従来、自傷行動に関与する要因として、Maisto, Baumeister & Maisto (1978⁹⁾) は、知能との関連を挙げてきたがこれらは、他の精神遅滞児・者群との比較において導かれた結論である。自傷行動の分類の研究において必要なことは、自傷行動が知能及び問題解決能力との関連があるという記述

ではなく、他の行動特性のなかでいかなる要因が自傷行動と関連しているのかを明らかにすることである。したがって、自傷行動を有する知能障害児・者間においてもそのチェック項目における反応パターンに差異がでるようなチェックリストを作成する必要がある。このような質問項目を作成するためには以下のことが重要となってくると思われる。1つは、本分析でも明らかになった様に、彼らの行動記述の際、定常的に高い感度を示す(すなわち差がやすい) B、Cの領域に含まれる項目を中心的に用いることである。しかし、今回の因子分析の結果、1番大きな寄与率を示したのは「日常生活全般における問題解決能力の因子」である。故に、この因子に影響を受けかつ本研究の対象者もその反応パターンに差がでるものを選択しなければならぬ。そこで今回は、B、Cの領域とAの領域をつなぐ視点として行動分析派の研究者達が用いるコミュニケーション行動としての問題行動といった視点を採用したい。Lovaas, Freitrag, Gold & Kassorla (1965⁸⁾) は、自傷行動の維持モデルをその器質的な問題ではなく、彼らと環

境の関係性の視点から強化という概念を使って記述した。このモデルは、自傷行動の対処方略の開発にとって一大転機をもたらすことになったものである。そこで、新たなチェックリストでは、Aの領域に含まれる言語の項目をより精密にし、Bの領域とあわせて<コミュニケーションの様相>として再編した。さらにBの領域の中でもCと関連が深いと思われるものおよび自傷行動に関する他の先行研究の知見を踏まえて<身体的・生理的様相>として再編した。

III. 行動特性チェックリストの林の数量化Ⅲ類による分析

1. 目的

本研究のこの部分は、肥後・小林(1990¹⁾)の因子分析および、素点分析から得られた知見をもとに、自傷行動を持つものの行動特性を測定するチェックリストを作成し、それを林の数量化Ⅲ類で分析することにより、彼らの行動の背景について分析することを目的とした。

2. 方法

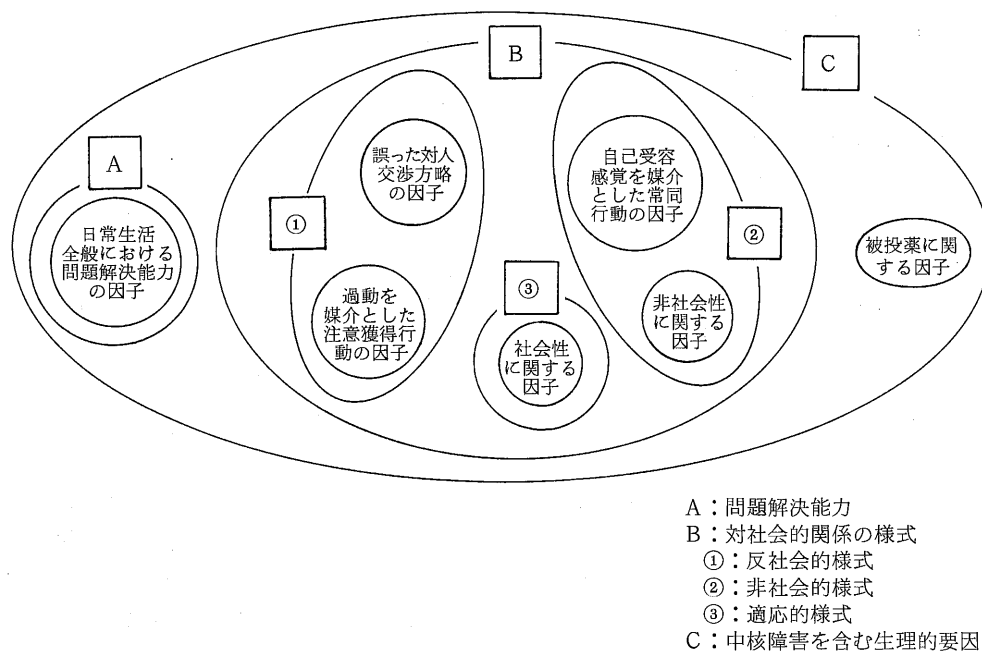


Fig. 2 因子の再群化後の構造

1) 対象児

T大学行動情緒障害研究室において治療教育を受けている者、3つの精神薄弱児・者施設、6つの養護学校、に措置されている者の中で自傷行動を行う者122人。男子72人(59.0%)、女子49人(40.2%)、不明1人(0.8%)であった。平均月齢は、275.5カ月(約22才10カ月)、標準偏差11.58であった。彼らの測定知能水準(Measured Intelligence Level: MIL)ごとの人数分布をTable 2に示した。IQのデータが確認できた者(106人)の中で、軽度が2.8%、中度8.5%、重度30.2%、最重度58.5%であった。

2) 調査内容および手続き

質問紙は、I. 本人の属性、II. 本人の自傷行動の特徴、III. 本人の行動特性の3部によって構成される。「I. 本人の属性」は年齢、性別、医学的診断、知能障害以外の障害(視覚、聴覚、移動様式)、知能指数に関する質問項目から構成されている。「II. 本人の自傷行動の特徴」は自傷行動の行動型、生起する状況、頻度、実行中の状況およびそれに関する指導責任者(対象者担当の施設、学校関係者)の印象、開始時期に関する質問項目から構成された。また、自傷行動の行動型の選定については、東海(1984¹⁰⁾)を参考にした。「III. 本人の行動特性」は、本研究の適応行動尺度の素点分析の考察でも述べたように<コミュニケーション能力の様相>、<身体的・生理学的様相>の2部を大きな柱とし、それにもとづき11の領域の設定を行った。さらにそれぞれの領域ごとに質問項目を選定し、チェックリストを完成させた。項目選定にあたっては、「適応行動尺度」、「ことばのようす⁹⁾」などの標準化されたものあるいは言語発達の研究等に使用されているものから選定した。また、自傷行動の症例報告(岡崎;1976⁹⁾)、第1著者の臨床経験等をもとに選定された項目もあった。各領域の質問項目数は以下に示した通りであった。また、総項目数は、67項目であった。

1部 コミュニケーション能力の様相

- A. 要求行動(8)
- B. 人の関心を引く方略(6)

Table 2 対象者の測定知能水準

MIL	程度	人数
0	普通	0
I	境界線	0
II	軽度	3
III	中度	9
IV	重度	32
V	最重度	10+(52)
	欠損	16

(): 測定不能

- C. 対人回避傾向(4)
- D. 表出系、語彙数・構文(10)
- E. 表出系、会話における問題点(11)
- F. 受容系、言語理解(8)
- G. 人なつこき(2)

2部 身体的・生理学的様相

- H. 身体的・生理学的様相(4)
- I. 感覚に関する行動特性(7)
- J. てんかんの有無及び投薬(2)
- K. その他の問題行動(5)

質問紙は、回答しやすい様に、具体的記述が心掛けられた。また、回答方法は、(はい・いいえ・以前そうだった)の三項目からの強制選択の方法が採用された。

調査の実施に関しては、留め置き法が用いられた。チェックリストは、対象者の担当の指導員・保母および養護学校の担当教師に配布し、各施設・養護学校ごとの回収責任者に回収してもらった。調査者は、後日それらを受取に行くが、その時点で調査紙の記入もれを発見した場合は、該当者に関する情報をその場で収集し、欠損値を少なくするよう努力が払われた。

3) 調査期間

1988年10月～11月

4) 分析方法の概略

外的基準を持たない多変量解析の技法として最もよく知られ、かつ用いられているものは、主成分分析と因子分析法である。主成分分析は、因子分析において主因子法を用いて共通因子軸を抽出する場合、その手順に関しては全く同一

であり、与えられた変数間の相関関係をなるべく小数の成分で説明しようとするものである。大まかに言えば因子分析で抽出された因子と主成分分析において抽出され主成分とはほぼ同じものであるが、それぞれによって立つ数学モデルが異なる。因子分析では、分析対象となる変数を、 x_1 、 x_2 の2つとし抽出された共通因子を f_1 、 f_2 とすると、

$$x_1 = a_1 \times f_1 + a_2 \times f_2 + u_1$$

$$x_2 = b_1 \times f_1 + b_2 \times f_2 + u_2$$

(u_1 、 u_2 は特殊因子)

と表現することができる。主成分分析において抽出される主成分 f_1 および f_2 は、数式でかくと以下ようになる。

$$f_1 = a_1 \times x_1 + a_2 \times x_2$$

$$f_2 = b_1 \times x_1 + b_2 \times x_2$$

因子分析は、仮想的な実体を仮定することによって現象の構造をより良く説明しようというものであって、現象の背後にある真実を探ることを目的としている。一方、主成分分析は与えられた、変数を合成あるいは要約しようとするものである。つまり、因子分析が探索的性格を持つものに対して、主成分分析は要約的記述をその旨とするものである。本研究の目的は、自傷行動を有する知能障害児・者の行動特性から自傷行動のを維持している要因を検出できないかどうかを検討することである。この目的に一致

する統計的分析法は外的基準を持たない多変量解析法である。しかし、上記の2分析法は連続変量を扱うのが通常であるので本調査で収集された質的データへの適用には不向きである。そこで、外的基準を持たない質的データの処理が検討されなければならないことになる。本研究では、我が国で独自に構築された林の数量化理論を用いた。今回の分析においては、データが(はい・いいえ・以前そうだった)といった質的なものであること、説明すべき外的基準がないことと言った条件及び、分析目標が自傷行動を行うものの行動の背景を探ることであることなどの理由から林の数量化III類を用いて分析を行った。項目の3つのカテゴリーはそれぞれ、「はい」-1、「いいえ」-0、「以前あった」-1、として分析を行った。

3. 結果

回収された122人分のデータは、チェックリストの中の「III. 本人の行動特性」の領域のデータのみを用いて分析された。分析に際しては、筑波大学情報処理センターのKUSPSSの林の数量化III類が用いられた。

Fig. 3は、抽出された成分のうち第10成分までの、固有値と寄与率をグラフにしたものである。各成分の固有値は、第1成分；0.268、第2成分；0.108、第3成分；0.103、第4成分；0.078、と次第に小さくなっている。寄与率も同

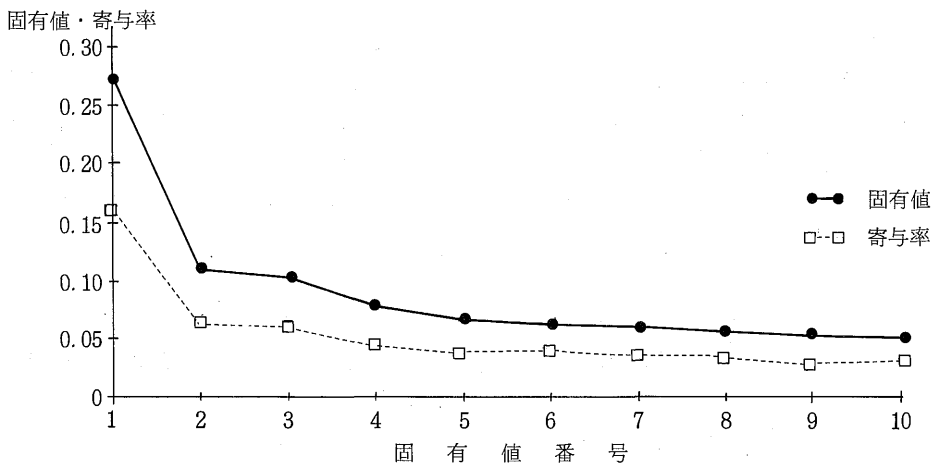


Fig. 3 固有値およびその寄与率

様な傾向を示し、第1成分が0.156で他の成分に比べ飛び抜けて高い値を示した。

抽出された成分のうち比較的固有値の高かった上位2成分に関してカテゴリー数量（因子分析における因子負荷量にあたる）を一番高いものから1.0まで、低いものから-1.0まで抽出したものをTable 3とTable 4に示した。

第1成分は、カテゴリー数量が正の方向に増加すると、対人回避傾向が高まり、負の方向に絶対値が増加するとコミュニケーション様式が高度になる。特に会話能力が、向上する傾向にある。したがって第1成分は、「対社会的交渉様

式」を意味する成分であると考えられる。

第2成分のカテゴリー数量の絶対値の正の方向への増加は、生理的な負因・痛覚の関与および高度な会話能力の関与を示している。また、負の方向への絶対値の増加は、会話能力の未熟さを示している。すなわちこの成分は、「痛覚に関与する身体的・生理的負因」を表す成分と、「会話能力」に関する成分といった2つの合成変量的なものであると考えることができる。

第1成分を横軸に第2成分を縦軸にし各サンプルの個体数量（因子分析の因子得点にあたる）と各項目のカテゴリー数量（因子分析の因子負

Table 3 第1成分において高いカテゴリー数量を示した項目

第1成分（固有値=0.268）

A. カテゴリー数量1.0以上 大→小

- (6)目の前で手をこきぎみに動かす (1.774)
- (17)視線があまり合わない (1.415)
- (2)要求行動がジェスチャーや指差しのみで行われる（クレーン現象もはいる） (1.384)
- (65)常同行動がある (1.205)
- (18)人が近づくと体を背けたり、逃げたりする (1.131)
- (61)てんかん発作がある (1.108)
- (15)人を避ける傾向がある (1.071)

B. カテゴリー数量-1.0以下 小→大

- (27)格助詞が使える（「○○が」「○○に」「○○は」など） (-2.209)
- (24)会話の中で形容詞を使うことができる。 (-1.876)
- (7)物を要求するときに聞き取りやすい文章を使う (-1.839)
- (28)疑問詞が使える（「どうして」「なに」「どれ」「どこ」など） (-1.758)
- (46)「私のまねをして」というと動作をほぼ完全にまねることができる (-1.703)
- (26)3語文を使う（「キイロイ・ジュース・ホシイ」など） (-1.606)
- (23)会話の中で動詞を使うことができる (-1.544)
- (29)言葉を用いた会話ができる (-1.490)
- (9)物を要求するときに聞き取りやすい単語を用いる (-1.489)
- (21)少なくとも10~20のことばを話す (-1.422)
- (43)内容が2つ含まれている指示にしたがえる（「お茶わんを置いてからパパを呼んできて」など） (-1.366)
- (25)2語文を使う（「ミズ・チョウダイ」など） (-1.249)
- (32)話すとき早口である (-1.219)
- (45)「私のまねをして」というと動作を不完全ながらもまねることができる (-1.202)
- (44)「○○はどれ」と言う身近なものなら指さしたり、言葉を使って正しく答えられる (-1.146)
- (14)言葉を用いて人を呼んだり、関心を引こうとする。 (-1.113)
- (22)日常生活によく使う名詞はだいたい知っている (-1.079)
- (20)5つ以上のことばを話す (-1.072)
- (33)話すとき、とぎれたり、突っかかりたり、不規則に中断したりする（ドモリなど） (-1.053)

Table 4 第2成分において高いカテゴリ-数量を示した項目

第2成分 (固有値=0.108)

A. カテゴリ-数量1.0以上 大→小

- (61)てんかん発作がある (2.036)
- (07)物を要求するときに聞き取りやすい文章を使う (1.607)
- (51)虫歯の治療を行う頃パニックや自傷行動が頻繁にみられた (1.558)
- (27)格助詞が使える(「○○が」「○○に」「○○は」など) (1.524)
- (55)痛みに対して敏感である (1.308)
- (62)投薬を受けている (1.209)
- (24)会話の中で形容詞を使うことができる (1.019)
- (60)目の前で手をこきざみに動かす (1.017)

B. カテゴリ-数量-1.0以下 小→大

- (04)物を要求するときに聞き取りにくい単語を用いる (-2.126)
- (34)発音が不明瞭で聞き取りにくい (-1.814)
- (03)物を要求するときに音声(言葉ではない)を用いる (-1.645)
- (50)中耳炎にかかっている (-1.556)
- (31)話し方がおそかったりうまく話せなかったり、話すときに非常に苦勞したりする (-1.502)
- (35)オオム返しが多い (-1.457)
- (06)物を要求するときに聞き取りにくい文章を使う (-1.404)
- (39)一つ一つ単語は言わせると言えるが、通常はあまり使われない (-1.379)
- (33)話すとき、とぎれたり、突っかかったり、不規則に中断したりする(ドモリなど) (-1.143)
- (47)多くの物の名前は知っていそうだが、言えない (-1.122)
- (13)音声を用いて人を呼んだり、関心を引こうとする (-1.047)

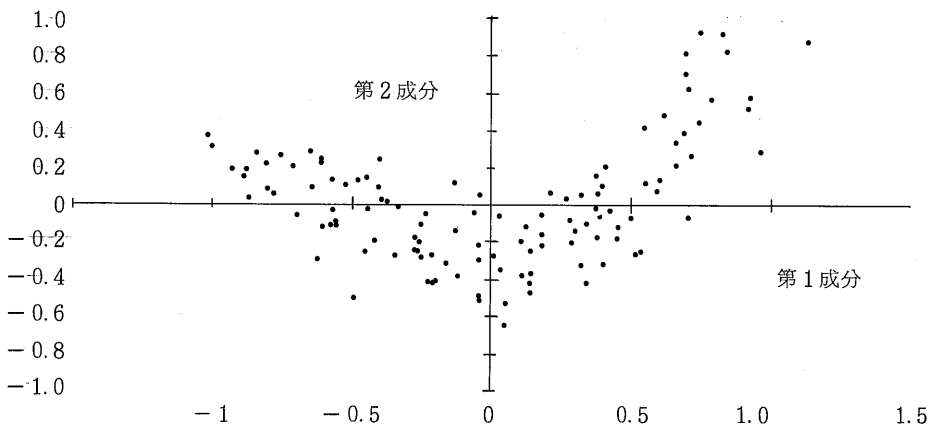


Fig. 4 個体数量の散布図

荷量にあたる)を散布図にしたものを Fig. 4 と Fig. 5 にそれぞれ示した。いずれもアルファベットの「U」もしくは2次曲線に類似した形状を示した。

4. 考察

1) 自傷行動を有するものの行動の背景

本研究では抽出された成分のうち第2成分までを解釈の対象とした。その結果、第1成分は「対社会的交渉様式の成分」、第2成分は「痛覚に関連する身体的要因と会話能力に関する合成成分」と解釈された。しかし、第1成分で会話能力を包括した「対社会的交渉様式」の成分が抽出されているので第2成分の特徴は、「痛覚に関連する身体的・生理的負因」を表す成分であることとよいためであろう。これらのことは、自傷行動を有するものの行動特性は「対社会的交渉様式」と「痛覚に関連する身体的・生理的負因」といった2つの軸によって規定されていることを示すものであろう。従来、自傷行動の治療に取り組んでいた行動分析学派は、社会関係のもとでの随伴性について詳細な検討を試み、その重要性を主張してきた。しかし、彼らは自傷行動維持におけるもう一つの要因である身体生理的な負因への関心は薄かったように思われる。今後、自傷行動の包括的な分類を検討する上では、これまで余り重視されてこなかった身体的生理的負因を両評価する必要があるも

のと思われる。

また、第1成分が、結果的に、高度な会話様式を1つの極とし、対人回避性をもう一つの極となしたことは、自傷行動の維持背景に社会性-非社会性といった次元が存在することを示しており、このことは、小林(小林;1988、小林・肥後;1989、小林;1992)の自傷行動の分類の視点である社会性-非社会性を支持するものであった。

2) 今回の分析の問題点

今回の分析上の問題点は、質問項目が67項目にわたったため、抽出された成分の固有値、寄与率が低かったことであろう。この問題点については、今回収集したデータを再分析し質問項目の精選を行い質問項目が絞り込めてくれば解決できる問題であると考えている。林の数量化III類の情報を基にグルーピングを行った場合、それらの臨床像がどの様に異なるのかについては、今回分析を行わなかった。先の質問項目の選定を含めて今後の課題としたい。

IV. おわりに

肥後・小林(1990¹⁾)にはじまる一連の研究の結果、自傷行動を有するものの行動の背景に「対社会的交渉方略の成分」「痛覚に関連する身体的・生理的負因と会話能力に関する合成成分」の2つがあることが明かとなった。前者は、自

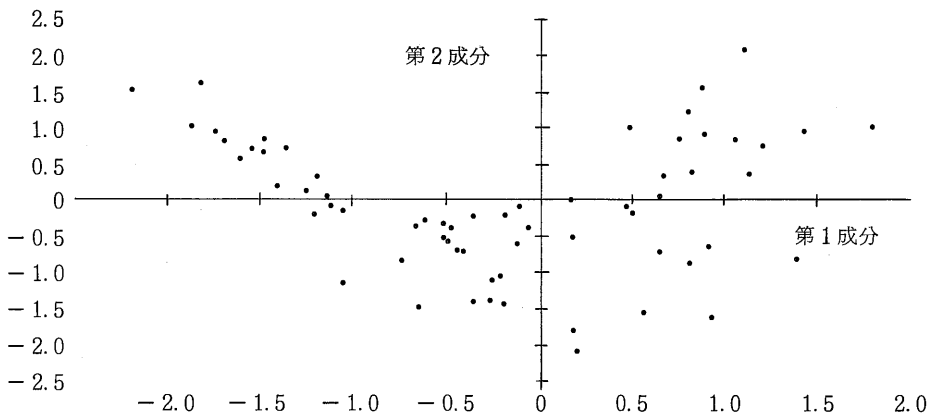


Fig. 5 カテゴリー-数量の散布図

傷行動の行動様式に「社会性-非社会性」の次元があること、後者は自傷行動の行動特性に身体的・生理的な要因が関与していることを示唆するものであると考えられる。

これらの知見は、自傷行動の包括的な分類を検討していく上で重要な役割を果たすものであろう。一方で、チェックリストの内容等の研究の技術面での問題や、今回得られた結果の具体的な症例を通じた検討など、残された課題は山積している。今後もこれらの1つ1つの問題を解決すべく研究を継続し、今回開発したチェックリストの精度、および臨床現場への適応性を高めていく必要がある。

文 献

- 1) 肥後祥治・小林重雄(1990): 知能障害児・者の自傷行動の研究, 一施設での実態及び適応行動尺度による行動特性の分析一. 心身障害研究, 15 (1), 35-47.
- 2) 肥後祥治・小林重雄(1992): 知能障害児・者の自傷行動の研究II, 一知能障害児・者の自傷行動の臨床像一. 心身障害学研究, 16, 101-109.
- 3) 小林重雄(1988): 学級集団への適応と学級活動への参加手立て. 実践障害児教育, 183, 38-41.
- 4) 小林重雄(1992): 自閉症児の心理特性と教育. 小児看護臨時増刊号, 15 (10), 1268-1273.
- 5) 小林重雄・肥後祥治(1989): 自傷行動と行動療法. 発達障害研究, 11 (2), 22-27.
- 6) 小林重雄・前川久男・水原利憲・佐竹真次・進藤桂子(1989): 言語発達遅滞児の発達順序性からみた伝達行動の変化. 昭和63年度厚生省心身障害研究報告書: 障害幼児を中心とした治療教育法の開発と統合化に関する研究, 130-143.
- 7) Maisto, C. R., Baumeister, A. A., & Maisto, A. A. (1978): An analysis of variables related to self-injurious behavior among institutionalized retarded persons. *Journal of mental deficiency Reserch*, 22, 27-36.
- 8) Lovaas, O. I., Freitag, G., Gold, V. J. & Kassarla, I. C. (1965): Experimental studies in childhood schizophrenia: Analysis of self-destructive behavior. *Journal of Experimental child psychology*, Vol. 2, 67-84.
- 9) 岡崎喜子(1976): 自傷行為のある子どもの指導実践例. 精神薄弱児研究, 219, 33-37.
- 10) 東海良興(1984): 自傷行為の発生過程の解析と制御に関する基礎研究. 兵庫教育大学大学院修士論文.
- 11) 富安芳和・松田 惺・村上英治・江見佳俊(1974): 精神遅滞者の適応の構造 1因子分析の試み, 特殊教育学研究, 12 (1), 10-23.

**A Study on Self-injurious Behavior in the Mentally Retarded III
: An Analysis of Behavioral Traits Using the Technique of Hayasi's Quantification III**

Shoji HIGO and Shigeo KOBAYASI

By the factor analysis in 1990, we found a unique structure of the behavioral factors in the mentally retarded with self-injury.

Under the process of data analysis in the previous study, We realized the necessity of developing a new type of check list to evaluate behaviors of the mentally retarded with self-injury appropriately.

The purpose of this study, therefore, was to develop a new check list for mentally retarded with self-injury. Firstly, Data of previous study were analyzed by descriptive statistics and a new check list was developed. Secondly, the new check list was applied to 122 subjects and results were analyzed by the technique of Hayashi's quantification III. Results of the analysis revealed two components in behavioral traits.

We considered one as "the component concerned with styles of interaction in the social environment". and another as "the component concerned with the negative physical conditions". It was considered that this finding was effective to construct a classification scheme of self-injurious behavior.

Key Words : Self-injurious Behavior, Mental Retardation, Hayasi's Quantification III